

ユースホステルにおける教育運動に関する評価不在の複合原因と 未来への可能性の提言

松山 勝彦

Compound Causes of Lacking Estimation on the Educational Movement in Youthhostels, and Promising Possibilities in the Future

HIYAMA Katsuhiko

【要旨】

日本に導入されて半世紀を経るユースホステル運動は、その間一貫して青少年の簡素な旅を通しての成長に資する教育運動体であることをうたってきた。『日本ユースホステル50年史』では、これまでの運動の理念の紹介に比重が置かれ、半世紀を経てどのような成果があったかについては、詳しく述べられていない。そこで、これまでの教育活動に関する評価の欠落の原因を主体ごとに探り、テーマの困難性、早い時期からの言説の乖離、コミュニケーションの不成立などを中心として論じた。次に日本のYHの特徴として、民家YHの参入、ミーティングの興廃、「豪華な夕食」主義の敷衍などを概観し、なぜ独特の習慣が生まれ、かつ横並びに一齐に改変するのかを考察した。90年代に廃絶した「ミーティング」は、それまでのYH運動の大きな実績であった。今後「YHで人生の影響を受けた」人々のノウハウを参考に、社会からの「ふれあい」の要請にこたえるべく、強要と没対話を避けながら丁寧に再興していくなら、YHは再び社会に資するであろうことが期待できるものと考えられる。

【キーワード】

ユースホステル運動、青少年教育、言説の乖離、歩く旅、事例調査

I YHをめぐるコミュニケーションと言説 の特徴

1 なぜ教育運動としてのYH運動は研究されてこなかったのか

(1) 問題の所在

ユースホステル（以下YHと表記）運動は、「ドイツの教員リヒャルト・シルマンが1913年に始めた、簡易で安全な宿のネットワークにより青少年の旅に資する運動」⁽¹⁾である。

当初シルマンは休暇中の学校施設を想定したが、欧州に多い古城などの協力を得ることにより、国境を越えてその運動が広まった。1932年には11ヶ国の協会が参集して第1回の国際YH会議が、アムステルダムで開かれている。そのころには欧州に滞在した日本人には、その存在が知られていたが、日本に導入されるのは戦後のことであった。

1950年の「日米人事交流計画」に参加した横山裕吉（日本青年館）などが、アメリカで

体験したYHを本格的に日本に広げ、翌年にはネットワーク作りを開始した。最初の会員専用YHは支笏湖畔（北海道）の廃校を利用し、1955年に開所している。それ以来約550ヶ所を上限に、日本ユースホステル協会（以下JYHと表記）は、全国にYH網を展開してきた。そしてこのYH運動は、自らを青少年教育運動として位置づけ、その課外での簡素で有意義な旅を支援するという目標を、今日まで一貫して掲げてきた。

ここで日本のユースホステル運動を象徴する、四つの誓いを引用する。ユースホステル会員やホステラーが守ることを求められる誓いが、JYH（日本ユースホステル協会）によって次の通り定められている。

****四つの誓い****

1. 私たちは、簡素な旅行により、未知の世界をたずね見聞を広めよう。
2. 私たちは、規律を守り、良い習慣を身につけよう。
3. 私たちは、共に助け合い、祖国の繁栄に努めよう。
4. 私たちは、国際人としての教養を高め、明るい社会を建設しよう。

この四つの誓いの文面には、旅の持つ教育力への信頼と、簡素な旅を若者に提供しようという信念が感じられる。この誓いの文章は、施設内の受付の上などに掲額され、声を出して読むことによって、その機能が果たされていた。声を出す機会というのは、たとえば夜のキャンドルサービスなどで、ホステラーの代表が暗誦するのであるが、今日ではこうした慣習は立ち消えとなった。この四つの誓いは、JYHの創設以来今日のハンドブックまでの長きに渡ってその巻頭を飾り、ユースホステル運動が教育運動であるという信念と理念を重視するこの組織の姿勢をよく現わしている。

ところで、YHのような学校外の青少年教

育は、主に社会教育学や生涯教育学の分野で取り扱われるべきであると考えられる。しかし両分野は戦後の「教育機会の民主化」の流れとも一体化し、「公民館運動」、「公共図書運動」、「青年団活動」、「夜学」、「識字教育」など、生涯学習権の自律的な獲得に関する事例研究が多かった。そしてYHは、これまでほとんど取り上げて研究されてこなかった。⁽²⁾ またJYH自身も、YH運動の目標を高く掲げつつ、その実際の成否については公式に評価してこなかったといえる⁽³⁾。これはすべての教育活動が、基本的に事前のデザイン、実行、そして事後の教育評価の三つのセットにより組み立てられていることを考えると、不合理な印象を与えるが、これはどう考えたらよいのだろうか。

(2) 研究の困難性や教育評価法の未確立

まず、前者のアカデミズムの側の事情を推察すると、YHは対象の性格上、宿泊しつつ参与観察する必要があるが、公民館や公共図書運動と違って、時間をどこで区切って分析するのが決めにくい。また青少年が自立的で簡素な旅を通して成長発達するのに資するという目的は共感を呼ぶが、しかしその個人への効果の分析法を編み出すのが難しい。つまり研究対象が茫洋としている上に、時間が区切りにくい研究とならざるを得ないと思われる。次に後者のJYH自身の事情を考えてみると、こうした評価法の困難のほか、実はかけ声としての「目標」についての言説が一定であり続ける間に、何らかの言葉の形骸化が進んだ可能性がぬぐえないという問題がある⁽⁴⁾。

YHは発足直後から、各地の青少年活動指導者をひきつけ、短期間に都道府県支部協会が成立し、呼応して地方自治体も公営YHの設立に予算を計上した。YHを結んで節約旅行をするバックパック旅行は一大ブームとなり、初期には多くの若者が国内でYHを体験

した。

このようにYHが社会に認知され、すべてに追い風で、個々のYHの個性が花開いた時期までを、関係者はしばしばYHの「全盛期」と呼び回顧する。全盛期というのは、最初の30年間つまり1985年ぐらいまでをさすようである。そうした語りでは、それ以後の時期はあえて名づけられた呼称はなく、「全盛期を過ぎてから」という言い方になる。そして、若者の旅の選択肢が増えることによってYHを使った旅が相対化され、今日まで会員数や利用者数が減少して来た。本稿では、関係者がJYHの発足から1985年までを全盛期とする区分をそのまま用いる。それ以後から現在までをポスト全盛期とする。ただし、会員数や延べ宿泊数のピークは1972年であり、81年には半減しているの、こうした年代区分には若干の説明が必要である⁽⁵⁾。

一方YHは単なる安宿ではなく、青少年教育の一環であるという理念による運動目標は変わらず唱えられたとしても、実際の個々のYHという現場でどのように実行されるかについて、実は確固たる評価法が初期に確立しなかったことに以後の問題の原点を見つけるものである。たとえば日本のYH独特の「毛布のたたみ方」、「食器洗い当番」、「キャンドルサービスと四つの誓いの朗読」、「朝のラジオ体操」といった諸々の習慣は早くから全国に推奨され広まったが、こうした実行法が広まっても「なぜ、ホステラー（YHの利用者）がそのように行動すれば」、「どういう教育効果があるのか」といった教育評価の確立にはいたらなかった。これらの評価法が確立しないうちにポスト全盛期となり、しだいにJYHの指導力が末端に届かなくなる時期には、宿泊者数減少対策こそがYHの抜本的改革課題となり、教育媒体としてのYH運動はますます関係者の集まりで話題にのぼらなくなるといった傾向を生んだものと考えられる。

2 言説と事実との乖離⁽⁶⁾

ドイツから世界各地に広まったYH運動は、各国の独自性を許容している。たとえばイギリスYH協会は、リバプールの徒歩旅行連盟が受け皿となって開設された経緯ゆえに、徒歩旅行支援という特徴を色濃く維持している。日本のYH運動も強い独自性を持っているが、実はその特徴はハードウェアとしての「施設や制度」以上に、ソフトウェアとしての「運動にまつわる行動の仕方、他者への規制の仕方、コミュニケーションのあり方」などにあったと、見ることができる。本稿は、そうした視点で日本のYH運動をとらえなおした上で、その原因については背景となっている日本社会まで視野を広げて考える。その一例として、前節で教育評価の不在とその長年の放置を指摘したが、さらにここで組織の内外における言説のあり方に焦点を当てたい。

九州のあるJYH直営YHのペアレント⁽⁷⁾は、YHの教育目標や四つの誓いを「自分は日々実行するつもりは全くない。」が、あえてその文言に「異論を唱えるつもりもない。」と明言した（2000年9月20日の聞き取り）。これはYH全盛期には、直営YHのペアレントは、民営YHや公営YHのスタッフに対してさえ、強い指導力が期待されていたことを考えると大きな様変わりである。とはいえ、実はかなり以前から公的な目標が末端のYHの現場でどう扱われているかはチェック機能がなかったといえる。あるいはチェックしないからこそ、実行されない理念の存在についてクレームを受けなかったともいえる。これは言葉の軽視と、簡単に言い換えてもよいが、その結果YHをめぐる「場」には、会員としての客が不在となることは、ほとんど意識されてこなかった⁽⁸⁾。

こうした現象は視野を組織の外に広げて、日本社会における言説のあり方という視点から照射しなおすのが有効であろう。それには

精密な分析が必要であるが、本稿では中島義道(1997)の主張する「会話はあってもそれがしばしば意味のある対話とならない日本社会」という評価に賛同しつつ、その理論に沿ってすすめる⁽⁹⁾。

JYHの公式年史である『日本ユースホステル運動40年史』(1991年)の各県協会の近況報告では、宿泊数減少以外の話題については何も書いていない報告が散見され、理念自体が実際の活動の振り返りの基準となっていない状況がうかがえる。

原則に立ち返ればYHの会員であるホステラーが他者である以上、整合性のある言葉で簡便な活動の説明がほしいものであるがそれがなく、そして会員が他者として意識されていないことが、常態化してきたといえる。

JYHという組織における言説と事実との乖離は、かなり早くから現れていたのであろう。初期の直営YHの元ペアレントのZは、組織内の話し合いでしばしば「どうして全然話が通じないのだろう。」とむなしかった場面を強く覚えている(2002年1月の聞き取り)。Zは使命感を抱いて自らこの世界に入ったYHの第一世代である。また、脱サラで旅行中に地方のあるYHが気に入って居着いた40歳代のペアレントのYは、「このごろは話の通じないおじいちゃんたちとは別に、若いモンだけで集まることにしている。」と公言する(2002年10月の聞き取り)。Yのもっとうちは、ホステラーに「求められた要求はすべて実現する」というものであるが、ホステラーとの会話自体は多くなく、距離を置いている。ZとYはまったく正反対のYH観を持って活動してきたが、コミュニケーションの習慣としては共通点があったといえる。それは、何か正しい規範がひとつあれば、本来「みんな」がそれに賛成するはずという信念である。しかし現実には人はそれぞれ別の考えを持ちがちであるからこそ、言葉でその違いを共有するという態度でスタートしたほうが、現実との

乖離が起こりにくいのではあるまいか。

各YHの手作りの文集、YH新聞や聞き取りなどで回顧の記憶をたどると、YH運動の初期には、さまざまな有為の人材が、ボーイスカウト、音楽、動物観察などの得意分野を携えてこの運動に参集し、この運動を全国に具現していったことがわかる⁽¹⁰⁾。しかしわかるのは、こうしたカリスマ性のあるリーダーたちが、どのように引っ張ったかという事跡だけで、大多数の関係者の意思や行動が伝わってこない。このことに気がつくとき、実はこの運動での対話の欠落はかなり早い時期から始まっていた可能性があるのではないかと思えてくる。加えて、他の青少年団体に比しても目標理念の実現が難しく、また経済的に困難であるゆえに話し合い議論する土壌が確保しづらいという特徴がある。簡単だが、ここではYHという組織の持つ言説の特徴について一石を投ずるに止めたい。

以上述べてきたように、日本のYH運動は、この半世紀間一貫してその高い教育理念を掲げてきたが、その行動評価は自他ともに無かった。その原因は、一つには分析の困難さからと考えられ、さらに見ていくと二つめとしてそもそも理念の言説そのものが実際の目標とされてきたのか否か、すなわち「言説と事実の乖離」についての検討が必要と考えられる。これらはやや後ろ向きの見方ではあるが、今後青少年教育運動としての日本のYH運動の評価法について考える際の、出発点として提示するものである。

II 日本のYH運動の特徴

1 徒歩旅行と日本のYHの貢献

シルマンの発案により世界に広まっていったYH運動は、受け入れた人々の専門性やその地域の個性が組織の実態に反映し、各国に特徴あるYH運動が展開されてきた。1930年に発足したイギリスYH協会が、徒歩旅行の支援に特色を持ち、今日まで歩く旅の拠点と

してYHがよく整備されて来ていることは既述した。ここではバックパッカーは自炊をしながら、簡素な旅行を続けている。これは終末期山地のなだらかな地形と、寒冷地で夏でも背の低いヒースなどが生えるといった程度の草原が広がるといった徒歩に適した地理的環境が、ブリテン島のあちこちに分布することと関係しよう。このイギリスの歩く旅のマップを作成しながら、日本にそのエッセンスを紹介したのが山浦正昭（元JYH職員）である⁽¹¹⁾。山浦は、日本国内でもモータリゼーションで分断されながらも生き残る「歩く道」のマップを作り紹介し続けたが、それは月刊のYH新聞でも1980年代以降には一面に連載された時期があった。各YHが近隣の歩く旅のノウハウを必ず持っていて、しばしばホステラーに薦めていた時期でもある。そうした歩く旅のコースには、積丹かもしYH（北海道）の賽の河原ツアーなどのように一日がかりの往復コースをヘルパーが道をつけたケースや、礼文島の八時間コース（北海道）のように地元民以外は近寄らなかった岩礁海岸の地域的美を見つけたケースが多かった。

そうしたガイドマップに載らない歩く旅マップの集大成となったのが「とらべるまんの北海道」⁽¹²⁾であり、男の涙、カムイワッカの滝（以上、知床半島）、落石岬、北海道三大秘湖、雨竜沼湿原、裏摩周、二風谷アイヌ部落などの歩き方を世に紹介した。著者たちは、長期休暇のたびに関東から夜行列車と連絡船で北海道に入り、主に野宿とYH宿泊を繰り返すホステラーであった。この「とらべるまんの北海道」の全頁の手書き地図のスタイルは斬新で、ガイドブックの新分野を切り開くとともに、その後全国の各YHのペアレントの手作り地図にも影響を与えている。⁽¹³⁾ そうして蓄積されたマップ情報は、山浦正昭なりの料理法で誰もが歩ける徒歩マップに昇華されたといえる。そして、全盛期を越しつつあったYH運動において、協会が積極的に

山浦の活動を取り上げ、歩く旅の拠点としてのYHの可能性をアピールした時期があったことは特筆に値する。

2 日本のYH運動

(1) 日本と世界のYHの共通システム

振り返って、日本のYH運動と世界との共通点をまず確認し、さらにその独自性に話を進めたい。まず国際的に合致する面としては、YHは原則として経営コストの安い相部屋（ドミトリー形式）なので、出会いの機会を保障するとともに静粛さの自己管理を学習する機会となる。またベッドメイクは自身です。相部屋の寝室とは別に、泊まり合わせたホステラー同士が談笑し、また歌を歌える程度の広さの「共有スペース」を確保している。各YHが何らかの時間の規則を持っていて、ホステラーは通常の「客としての契約」によってではなく、被教育者的立場で「守る」事が求められている。したがって契約違反への罰金よりも、規則不履行への叱咤が与えられる場合が多い。通常時のホステラーへの気配りは簡素であるが、非常時には暖かい配慮と援助が期待できる、などといったことである。

ところでこうした共通点の中でも、特に相部屋制と共通談話スペースの組み合わせはYHが世界中に広めた簡易宿のシステムであるが、その後そこから派生した各国のゲストハウスや、北海道の「とほ宿」ネットワーク⁽¹⁴⁾、「遊」民宿グループ、そして京都で毎年増加している町家改造のゲストハウス⁽¹⁵⁾が生まれてきているといえよう。つまりYHの理念が本来持っていた「教育」臭や規則を省いて、その経営システムを取り入れた新形態の簡易宿が、YHの活動の場を犯すライバルに成長しているのである。

(2) 家庭開放型YHの運動への参入

一方日本のYH独特のシステムとしては、

まず民家, 寺社, 鯨番屋, 合掌造りなどの歴史建築から, 巨大なYH専用建築まで, 建築景観の多彩さが上げられる。歴史建築のYHへの援用は各国に普通であるが, 日本では特に小規模の木造民家が運動に賛同してYHとして多数契約したという事情がある。まつばYH, おんないYH(現在のメープル仙台YH), みさとYH[以上, 東北], 小夜の中山YH[中部], MGYH, 山の里YH[以上, 中国], ルノワールYH, 吹上浜YH[以上, 九州]などはその例である。山の里YHは旧家の農家であるが, 町役場に勤めていた子息が国際交流でやって来た外国人との出会いをきっかけに感化を受けた両親が始めたYHであった(2002年10月の聞き取り)。家の前には野菜や衣類を洗う小川が流れているが, そこに佇むだけで田舎の者には出入りする昆虫などの小動物がよく見えるということ, ペアレントは身を持って都会の青年たちに伝えていた。また, 被爆した記者が湯治のために建てた民家を開放したのがMG(モダンガイド)YHである。みさとYHは現在もホステラーに農作業をさせている。

(3) YH全盛期と「ミーティング」の興亡

かつて日本のYHに泊まって最も印象的だった経験は, 夕食後の「ミーティング」で, それは90年ころまで続いていた。日本のYH独特の行事なのでカッコつきとしたが, およそ八時くらいからお茶を供しながらゲーム, 自己紹介, 歌, 周辺のコースガイドなどをして一時間から二時間ほど行われた。時には踊りや, 絵本の朗読, 寸劇など内容は多彩であった。各YHがオリジナルソングを作る場合が多く, その一部はJYHによりLP『一緒に歌って』全三巻に収録されている。このようにミーティングはスタッフにとっても力が入る作業であり, ホステラーにとってもYHに泊まるという経験の大部分をミーティングが占めていると言い得るくらい影響が大きかった。しかしながら一方で, ミーティン

グには苦情が多かった。建前として自主参加としていても, 不参加には理由を示すことが求められた。

先述したようにYHの施設には共用スペースがあるので, 日本以外のYHでは自然発生的な会話の輪が毎晩発生している。こうした出会いのミーティングを制度化し, よく煮詰められたプログラムのショーとして提供したところに, 日本のミーティング文化の精髓があるといえよう。実際ミーティングはエンターテイメントとしてよくできていて, 見知らぬ他者と知り合い, 明日の旅の情報も得たいといった複数の欲求を同時に満たしたい場合に, すべてそろえて提供してくれるフルコースと呼ぶべき行事であった。ただしそのようにミーティングを楽しみ, 賞賛するためには, いくらかの自主性を放棄する必要があるが, そのあたりの多寡が苦情とも直結していたといえよう。

ところでヘルパーたちが, ミーティングをホステラーに強要することが, 可能となった心理的要因はどこにあったろうか。多くの元ヘルパーが証言するのは, 「自分が体験してよかったこと」を是非とも他者にも体験させたいという気持ちを持つのが普通だったということである。ここでは説得される側の反応と価値基準の多様性は考慮されていない。

しかし, より広い視点からこうしたヘルパーの行動を眺めると, 「空間」の先後感の問題のほうが検討に値しよう。すなわちこれは, いわゆる人気YHにおける「常連」問題とも関連するのだが, ある空間に初めてきた者は無条件に先着者の指示に従い, 少しでも長く居れば後着者の面倒を見るのが当然といった感覚である。宿がこうした空間の先後感とでもいべきものに左右される現象は, 管見する限り日本のYH以外では例を知らないのであるが, 結果として「旅に出るのではなく特定のYHに繰り返し行くことによっても, 楽しみを見出せる」人々の群れが大量に出現し

たのである。これは、先述のミーティングの強制の心理にも関係するかもしれない。こうした常連問題は、ミーティングもYHも好きというYHフリークにとっても、不興の種でYH批判の大きな要因であった。実は現在でも、こうした問題は一部に残っており、興味深いのは長期に一箇所のYHに留まる外国人は、場に慣れはしても決して新人を仕切るといったことはない。

ところで「空間」の先後感というのは、「場のポリティクス」として包摂される問題であり、昂ずると匿名的な会話に発展するようである。常連たちは、YHの新着者に対してどこから来て、名前は何で、交通手段と明日の目的地はどこかと繰り返し質問するが、自己紹介する必要はまったく感じていない、ということがしばしばいわれる。これは、もちろん自身を意図的に隠して対話しているのではなく、自身が標準でありその標準との差違だけを、話題にすればよいという感覚である。たとえば、アイヌ部落に観光に来る和人がよくとる会話のパターンもこれに類似すると聞く（1987年の北海道の白老町での聞き取り）。もし、このようなコミュニケーション・パターンを、YHが助長する面があったなら、教育の空間としてはマイナスの要素を持っていたかもしれないということであり、原因の分析を含めて将来の検討課題であろう。

かねて賛否の声がともに多かったYHのミーティングの存廃問題は、1990年代に入り利用者の激減対策としてすぐさま実行できる可能な施策のひとつとして取り上げられて、短期間に一斉に消えていった。それまでが半ば強制することが常態化していただけに、今度は「考えが古い。」といった評価とともに、一気に廃絶に向かったのはいかにも極端から極端への方針の変更であった。YHには多くの関係者がいることを考えると、個々のYHの実情に合ったもっと多様な結論があり得た

ろうが、現実にはほとんどのYHの夜は静寂へと様変わりしたのである。この時期によく用いられた慣用句としては、ペアレントがミーティングを期待するホステラーに対してさえ「ミーティングは強制ではありませんから。」と応えるものであった。もちろん強制でないのなら、希望者とペアレントとで開始すればよいのであるが、なぜかそうした中間的な行動は避けられていたといえる。

興味深いのは、今日でも時折スタッフが「ミーティングは強制できませんから。」という趣旨の発言を続けている点である。ミーティングの消失から十年以上たち、実はスタッフでもミーティングを経験したことがないケースが多く、実際にはミーティングを「できない」場合がほとんどである。こうして発足時の出会い重視のスタイルからは意外であるが、YHのスタッフのコミュニケーション能力を磨く機会はほとんどなくなりつつある。その遠因は90年代のミーティングの廃止まで遡れよう。こうした状況が続くと、YH運動の青少年教育運動としてのもっとも大切な自負を実現し、ホスピタリティを維持することはおぼつかなくなるであろう。

(4) 「豪華な夕食」主義の敷衍をめぐって

このYHにおけるミーティングの廃止の時期に、時を同じくして始まったのが豪華な夕食提供である。それまでは、名物料理を認知させるYH（うな重の土浦増尾、カレーライス of 旧稚内、ジンギスカン鍋の塩狩温泉などの各YH）や、特殊な食材ルートを持つ豪華な食事（牧場と特約した埼玉県の公営YH、海鮮の美国YH）などの例外を除けば、通常は3種類の夕食のローテーションが普通であった。経営側の意識としては食事提供は決まりだから出す程度であったのが、この90年ころに、食事作りの意識改革が行われ、ほとんどのYHで豪華な食卓となったのである。その共通点を挙げると、素材ではペンションや

民宿と争えないので、帰宅して真似たくなるようなちょっと凝ったレシピを工夫すること、メインディッシュにお金をかけるより、品数を増やし、自家製デザートや飲み物で贅沢感を演出するものである。その結果、今日の日本のYHを特徴づける最大のポイントは夕食といってもよい程であり、ホステラーの行動として、旅程よりもうまい夕食を一度食べるために、YHを選ぶという新傾向が出てきた。

またスタッフの側は、掃除と夕食作りが最大の仕事となり、実感としてはほとんど一日中夕食の仕事に関わっている感覚とも言う。作り手と食べる側の会話の機会がなく、黙して食べるだけという夕食もありがちな事となっている。こうした豪華な夕食自体に問題はないが、ここでもホステラー自身が何を望んでいるかは、実は多様であるということが忘れられかねない点が指摘されよう。「夕食に力を入れるのはいいこと」であり、そのためにこんなに努力しているのだから、相手も当然受け入れなくてはならない、といった感覚におちいるとすれば夕食提供の観点から見て合理性に欠く可能性が生じる。

ホステラーには個性があり、また旅先での価値観は多様である。たとえば、駅から数キロメートルのYHまで歩いて坂を登っていくことを楽しみにしているベテラン・ホステラーがいるが、ある日旧知の仲のペアレントから「Aさん（友達なら）うちの夕食をとってくださいよ。車で送迎しているのだから。」と苦言されたという。そのYHでは専用のコックまで雇っているので、自然な本音である。しかし「YHは歩く旅人の簡素な旅行を応援する。」といった本来の理念の骨抜きを、Aは実感する（99年1月のききとり）。その他、夕食に間に合わずに怒られたことだけが唯一のペアレントとの会話といった事例は増えており、コミュニケーションの浅薄化によって「今日はどんな人と出会えるか」といったか

つてのYHを彩った最大の楽しみは背景に沈み、ホステラーは迷惑をかける人か否かという二種の記号のどちらかでしかないようにみえる。実はこうした小さな「行き違い」を強化しているのは、YHの側が自ら望んで豪華な夕食作りに特化したわけではないという事情も無視できず「こちら是我慢しているのだから、そちらも（事情はあるでしょうが）マイペースはおやめください。」といったメッセージが隠されていよう。だとすると本末転倒であり、YHの側が日々刻々に自分の意思でものごとを選び、その選択に責任をとって行くことが大切ではないだろうか。

ここまでこの組織のネガティブな概観分析を挙げてきたが、私自身は今後の日本社会の中でYHの価値をポジティブに見出している。その出口は再度ミーティングなどのコミュニケーション機能を重視することであるが、それについては本稿の最後に提案する。

Ⅲ 全盛期におけるYH創造

1 支笏湖YHの回想

ここまで、半世紀に及ぶ日本のYH運動の歴史を、その成果評価法の未確立に着目して、言説やコミュニケーションという縦糸でやや強引に整理してきた。本章では、運動の第一世代の一人に対する具体的な聞き取りを紹介し、当時実際に起こったことが質感をもって提示できるように試みる⁽¹⁶⁾。

Xは、70年代からしばらく支笏湖YHを運営した。当時日本初であった女性の直営YHペアレントは、以下のような事情で生まれたのである。Xの夫は初期の北海道YH協会の関係者であったが、自営業も営んでいて多忙であった。Xは幼い娘の不治の病に効く方法なら何でも試したいと思っていたところに、支笏湖YHの話があり、空気のよいところで娘の転地療養になればと、この世界に飛び込んだのである。娘と二人きりのスタートであったが、小さな支笏湖畔の集落ではまったくのよ

そ者はなかなか受け入れられなかった。

おそらく、国立公園内の新規の旅館の開業が困難な地域に、行政の肝いりで突然にYHがやってきたことや、Xが都会の女性であったことも遠因となっていたらう。そこでXはヘルパーと二人で、毎朝集落の全戸に新聞配達を始める。アルバイトを始めたのは経済的な理由ではなく、そうすることによって、一人一人と親しもうと考えたからである。当時一緒に新聞配達をした第一号ヘルパーとは、今でも連絡を取っている。

こうして何年かかけて、集落になじむ間に、残念ながら娘とは死別した。しかしそうしたプライベートな経緯は、ごく内輪以外には20年後の今日までほとんど伏せられてきた。もともとフォークダンスやレクリエーションダンスを専門としていたXは、毎晩野外でのジギスカン鍋が洗い終わったところに、集団のダンスを主導した。

好悪は別として、珍しいダンスでリフレッシュできるYHとして、支笏湖は知られるようになるのである。当時のYHでは珍しくなかったが、ダンスのミーティングを通して出会い、翌日オコタンペ湖などに探検して結ばれたカップルは数多い。ミーティングは二部構成で、ヘルパーによる周辺ガイドは抱腹絶倒で何度聞いても笑えるという評判であった。

ミーティングは、「楽しませ、記憶に残し」日常生活に帰ったときに何らかの力になるものが、デザインされた。こうした周到な準備による空間の提供が繰り返される一方で、毎日のように起こる小さな事故、さまざまな個性との出会いに、その場その場で即決が求め続けられていた。シーズンには毎日百五十人ほどが泊まっていたのだから、すべてに目を配ることはできなかった。しょっ中ヘルパーが判断を求めてくるのである。それに引き換え冬には、とても暇になり、考える時間は有り余るが、考える必要もなくなっている。

この支笏湖YHのジギスカン鍋にこびりついたこげをこすり落とすのは、とても難儀で時には一時間近くかかるが、運悪く当たった当番は、多くの場合いい思い出になっていると回想する。YHの全盛時代の70年代にはもうすでに、若者の経験不足と生活感の希薄化は始まっていて、こんな機会でもない限り、鍋と格闘しない者が大半であった

また当時のYHでしばしば起きた「事故」は、汲み取り式の便所にオーバーオール胸ポケットから財布を落とすことで、北海道では肥溜めが消えかかったころでまだ臭い汲み取り便所が多かった時代である。今ならば、そもそもそういう便所では用を足さない旅人が多いだろうし、運悪く落としたなら財布ごと捨ててしまいかねまい。してみると当時は、若者の生活感希薄になりつつあるが、まだ自然や環境には従順な過渡期にあったのかもしれない。大都会で窓のないトイレが普及しだしたのもこのころで、それは強力な換気扇を24時間回し続けることによって維持されている。最近の新築のYHでも24時間換気中のトイレが散見されるようになり、音がうるさいといってスイッチを切ることは許されない。ベテラン・ホステラーの、「虫の声を聞いてゆっくり寝られるなら、匂いはいいよ。」だって「便所は臭いんだから。」といった鷹揚な意見はむなしく響き、多数派の同意は得られないようであった（2001年5月。東日本のYHでの観察）。

ここでYHの第一世代なら、XだけではなくYHの運営上の判断の中に、その教育的使命という価値基準を忍ばせては逡巡する場面があったであろうが、きれいな新築YHのペアレントの判断はわかりやすい。そんなことをすれば、YHの評判に関わるというだけである。支笏湖YHは、木造の小学校舎を譲り受けたもので、味わい深く、自然を感じながらすごせたが、「今の旅行者には寒くひもじく無理かもしれない。」という。赤い三角屋根の外観は

似ている改築後の支笏湖YHは、皮肉なことに利用者を大幅に減らした。ゆっくりできる電熱カーペットも導入したのに、連泊者が居場所がないといって、出て行くという。このあたりも含めて、YHの半世紀で施設の空間とホステリング活動（ホステラーの旅行活動）との関係でどういうノウハウの蓄積があったのか、検討すべきときであろう⁽¹⁷⁾。

娘の死後しばらくして、東京にいた息子夫婦が脱サラをして手伝いに来た。その息子も今は、YHをやめて支笏湖に喫茶店を開いて永住した。X自身は札幌に戻ってから、人生がさらに二転三転したが、老後のために建てた木造の家の一室を開放して民宿を営んでいる。チラシは、YHなどに置いてもらっているが、支笏湖時代を懐かしんで来る客が多い。今のYHについては、「どうしてこうなったんだろう。」とため息をつくことがとても多いが、「自分は昔の人だから」と言っただけで、今のことについて意見を口にするのはまずない、という。

日本にYH運動が根づいた初期にはさまざまな分野の専門家が参集し、今から見るとYHは人材の宝庫であった感がある。児玉喜市郎（別府YHの初代ペアレントで、同じく第一世代）は、「今のYHに人材がいないのは、経済的に当然のことだ。」という（2000年9月の聞き取り）。

つまりいかにして、宿泊者を増やすかについていいアイデアを出すことが先決で、経済的な自立が好人材を集めるための好循環に戻る条件だということ。日本にYHが入ってから7年目に開業した児玉の記憶では、黙っていても人が毎日集まり70人の定員では足りず、廊下にもホステラーを泊めた時代がかつてあったという。そうした混乱の中で、さまざまなドラマも生まれ、思い出や友情が育まれた。当時のホステラーは施設不備ゆえのハプニングを楽しみ、そこから遊びと出会いを作っていた世代といえる。対比すると、現在の

YHの施設は次第に完璧に近づきつつあるが、出会いの会話は希薄になって来ている。

児玉の指摘する経済面であるが、私はやや結論を急げばYH活動は経済的に引き合わなくなってきたのだから、その社会的意義を再整備する引き換えに、公費補助を受けるのが、適当と考えている。ではどのように、再整備可能であろうか。次章で考えたい。

IV YH運動の教育力とミーティング再興のポイント

日本のYHに90年代初頭まであった準強制ミーティングの効用と、マイナス面については私なりに説明した。ところで90年代は空前の産直市設立のブームがあり、その多くがJAや自治体により「ふれあい市」と名づけられた。ここで逆説的にあらわになるのが、現代の我々がいかに他者と出会い、触れ合っていないかの証左であろう。残念ながら、市の売り手としては生産者の農民よりも、生産に関わらなかった若い女性が好まれる傾向もあり、これは消費者と生産者のふれあいの阻害要因となる。つまり実態としては、たとえば隣国の韓国の市と比較しても、ほとんど心の接触が乏しいのが、現代の日本の売り買いの空間に見える。

また、国鉄が分割民営化し、新型車両への集中投資が繰り返される中で、客席で居合わせて会話を始めるきっかけは年々乏しくなっている。いつでも誰にも他者と出会いたいという欲求があるというわけではないだろうが、しかしそうした選択が可能な空間はすみに追いやられ消えつつある。そのことに対する心の渇きが、90年代からの全国でのふれあい市の設立ブームに向かわせたといえよう。すなわち日本社会では、見知らぬ他者との出会いとコミュニケーションへの需要が高く、その傾向は今も続いているがそれに代る機会は減ってきていると考える。

ここまでYHの成果の評価の困難性を強調

してきたが、青春の一時期の旅をYHとともにすごしながら、そこから人生に強い影響を受けてきたと自覚する一群の人々も存在する。とするならYH運動のもつ人々の人生への教育力は、丁寧な聞き取りによって因果関係を掬い取っていく行き方に評価の光明があるかもしれない。幸いYHに影響を受けたいくつかの世代が、その程度と質を内省するのに十分な時間が経過してきたといえる。旅を介して、YHが人々の人間としての成長に貢献してきたことの全体像を計測する機は熟しつつあるといえよう。

そうした指摘をした上で予察的に一点強調したいのは、YHの全盛期にYHと関わって強い影響を受けた人々にとって、その思い出は一過性のものでなく何ものにも代替できない場合が多い。そうした経験と思い出を高い価値に押し上げているのは、必ずしもおいしい食事やきれいな施設ではなく、出会いと交流の空間そのものであったと多くの人々が自覚しているはずである。

人々が、そうした生涯にわたる果実をYHから取り入れることが可能であったのなら、今日のYHの進むべき道としても、コミュニケーションの空間としてのYHの再構築は再考に値しよう⁽¹⁸⁾。そのキーワードは、強制のないボランティアのミーティングの復活であり、人々が短い一晩に効率よく他者や情報と出会い、ちょっとした経験を得られるようなわずかなお手伝いである。また、そうした暖かなホスピタリティの発揮は、他のゴージャスな接待よりも強く印象に残り、リピーターを生むであろう事が予想される。

いずれにしても、こうした何らかの形のミーティングの復活で大切なことは、スタッフの側は充分で継続的な議論を通じて、目的と行動と意見の相違点を明らかにしておくことである。かつてのYHの組織内部で話し合いが機能していなかったと想像されるように、ひとつのYHにおける複数のスタッフ間で絶

え間ない議論を楽しむ柔軟さが保障されていないなら、いずれどこかで「これはいいことだから。」とホステラーにミーティングを押し付ける行為を自分がしたときに、自覚できない愚につながっていくだろう。それではコミュニケーションを提供するはずの空間で、対話を打ち切るという逆説に落ち込むことになってしまう。繰り返すが、世の中には正しいひとつの真理や良いことがあってみんながそれに従うという仮定を探し求めるよりも、個々人の考えは多様で何が真理かも事前にはわからないので表現することと聴くことに、細心であらねばならないという点が、YHにおけるミーティング機能の再興には肝要である。形式的ではない再興をするなら、現実と常にリンクし続けるわけであるから、極端から極端に針が触れることもなく、把握しやすく安定したメッセージを流し続けられよう。

それは、旅でさえ孤立化しがちな現代の没交渉社会で、YHが積極的に示していける別な旅の選択肢となり、生涯教育のひとつとしてのYH運動の持つ教育力の誇示となるろう。

【注および参考文献】

- (1) 以下のYH運動の発祥と伝播については、日本ユースホステル協会（JYH）、『日本ユースホステル運動50年史』、2001,pp26-42を参照。
- (2) 社会教育学会の月刊『社会教育』は、まだ国外情報の乏しかった1954年に「海外の社会教育視察記」という特集を組み、日本青年団の横山裕吉が西欧の事情について寄稿している。（横山裕吉、「社会に教育される西欧の青少年」、『社会教育』10-3,1954,pp15-19）横山はこの論文でドイツには公民館がないが、社会が青少年を教育することが期待されており、その一環としてのYHの果たす役割を強調している。このように運動としてのYHの社会的理念が先駆者によって紹介された後には、YHは取り上げられなくなる。
- (3) たとえば1971年より十年ごとに4回出版された記念史では、そうした教育成果の評価に関わる記載が見当たらない。日本ユースホステル協会、『日本ユースホステル運動50年史』、2001。では、改めて半世紀前の運動の理念が時系列的に整理され紹介されているが、その成否については触れられていない。
- (4) 本稿ではこうした現象をくくって「言説の乖離」あ

るいは、「言説と事実の乖離」と再三呼んでいるが、若干の説明をしたい。全盛期まではJYHの教育理念に従うよう指導されたが、対等な質疑には欠けていた。ポスト全盛期にはいよいよ理念の実現は遠のき、YHの現場では「実行されないこと」と、「理念の維持」の両方が今日まで続いている。

- (5) 会員数の推移から見ると、そのピークは72年の約63万人である。これは、かに族が流行し、若者の長期の節約旅行にYHが一手に対応していた時期と重なる。その後81年には約半減し、85年から93年まで20万人前後で推移し、さらに漸減の時代に入っていく。のべ宿泊数も同様のカーブを描き、73年の3,409,833人をピークに、その後83年には約半減し、85年から92年まで130万人前後で推移し、現在はさらに半減している（日本ユースホステル協会、『日本ユースホステル運動50年史』, 2001, pp257-266）。

しかし70年代から80年代前半は、実は第一世代のペアレントが館内の運営の前面から引き、ヘルパーがリードして個々のYHの個性が最も花開いた時代であったといえる。そのため、そこまでの時期をYHの全盛期に組み込むことは関係者の実感と合致しているのである。問題はその時期のホステラーが、家庭をもち旅に使える時間が減った80年代後半に、次の世代が会員として参入してこなかったことにある。こうして20年以上続いた会員減少が、実際のYHの光景を現実寂しいものにしたのはようやく90年前後になってからであった。

以上の状況から、85年を契機とする全盛期とポスト全盛期の二つの時代区分は、大雑把ではあるが有用と考え本研究でも従う。ただし、私は日本への導入当初の運動に力点を置いた精密な考察に際しては、草創期（～70年代）、隆盛期（80年代）、減衰期（90年代～）の三区区分が妥当性を持つ場合があると考えている。

- (6) 本稿では、多くのYHの具体的事例と、聞き取りや参与観察を元に論ずる。その際に公開を前提とした聞き取りなどを除いて、原則としてYH名を出さない。ただし、資料自体の客観性を担保するため、元データに関する問い合わせにはできる限り応ずる。
- (7) ペアレントは「YHは旅の我が家」という方針によるYHの管理責任者の呼称で、後に管理者夫妻の両者を指すようになる。1994年からは、英米の動向を受けて、マネージャーという呼び名と併用する。ヘルパーは、ほぼ無給のボランティアのスタッフである。また、YHに泊まって旅をする者をホステラーと呼ぶ。この呼び名は全盛期の観光地では比較的良好に知られていたが、現在はほとんど用いられない。この用語は当時はある種の社会的役割も付加され、たとえば喫茶店に「ホステラーの皆さんへ」といった張り紙があれば、それは遠くの都会から来たリュックを持ち込むやや不潔で陽気な人々に対する気軽な呼びかけを意味してい

たとったような例である（1980年前後の小樽市内の喫茶店など）。「YHは旅の我が家」という理念自体はシルマンの思想にまでさかのぼれるが、しかしそれが日本に導入されると、その原理的ともいえるほどの徹底が行われた。たとえばスタッフは、ホステラーの到着時に大声で「お帰りなさい」と言って迎え、一晩を過ごして出発するときには盛大な見送りとともに「行ってらっしゃい」と叫ぶのが、全国的に広まっていった。しかしここでは、日々の個々人との出会い以上に朝夕の行事が慣習化し、相手が実際に何を望んでいるかには注意が払われず、時には対話の阻害要因にさえなった。こうした「旅の我が家」としての習慣は、90年代初頭のミーティング廃止と時を同じくして取りやめとなり、ヘルパーにとって何よりも大切な仕事ではなくなっていく。

- (8) YH組織の情報には多くの混乱と、矛盾が含まれ、一例を挙げれば90年代までのYH新聞の休館案内などには事実と異なる掲載がしばしばあった。そうした際には、誰もが被害者のように振舞うが、誰もが会員に対して言葉の責任を取る必要を感じないという傾向があった。
- (9) 中島義道、『「対話」のない社会』, PHP新書, 1997, 207p
- (10) ここでは全国と各支部をリードした初期の幹部たちのことを指す。しかし実は、末端のYHでも、運動の初期に多くの人材が集結していたのが日本の特徴である。民営YHでは、地元で経験を積んだ人々が、なかば手弁当でその半生の経験と個人的な所蔵品をホステラーの教育目的に提供していた。公営YHでは、公務員や教員が転出する例が多かったが、彼らはYHの未経験者でありながら、やはり地元民としての経験知のすべてを提供し、新しいYHの場の創造にしばしば貢献した。こうした現象は、YH運動の理念への共感なしでは起きなかったろう。当時、合掌造りや古寺、古民家などの文化遺産に親しむことが可能であったのも運動の効果であった。ところでこうした第一世代の貢献はほとんど報われず、とくに旅人出身者の多い次の世代の経営者たちから低評価を受けてきた。

そのギャップの経緯については本稿では論じないが、ただ第一世代の多くが引退した今そのYH作りの経験の聞き書きが急がれる。そして全盛期までの各YHの膨大な数の手書きの会誌類では、ホステラーやヘルパーが比較的率直に自己の考えを吐露しているが、ペアレントには自制が目立っている。（御前崎ユースホステル、『あしたばのうた』, 1981, 55p, 佐久間吉沢ユースホステル、『佐久吉分校』, 1981, 75p. など）。またトラベルライターに依頼して、ペアレントの人柄などを紹介させた稀有な記録として北海道ユースホステル協会、『昭和五十年の北海道のユースホステル』, 1975, 105pがあげられる。

- (11) 山浦はYHを利用しながら、長期間にわたって歩く旅の文化を実践し主張してきた。(山浦正昭,『歩き文化論～人間を旅する原点を求めて～』, 経済界, 1986, 204p, 山浦正昭,『夫婦で歩き描いたヨーロッパ縦断4000Km』, 新評論社, 2006, 245p)
- (12) 栃木県の複数のホステラーがペンネームで製作し、70年代からYHなどで販売された全編手書きの自費出版のガイドブック。特に(とらべるまん,『続とらべるまんの北海道』, 自費出版, 1985, 95p)は最終版として、貴重とされた。市販のガイドブックにない一日コースの歩くポイントを発掘し、またそれまで一部の登山者などには知られていた、困難だが美しい自然のコースもイラストと共に紹介した。この本で世に出たスポットは数多く、ホステラーの旅のあり方を変え、さらに観光産業が後追いをするという現象さえ見られた。また手書きの徒歩マップという地図のスタイルも、独創的で強い影響を残した。
- (13) フリーハンドで書かれた地図であるが、実践的で使いやすく、分岐点や印象的な岩などに独自の命名をして旅人を現地に誘った。これが可能だったのは北海道では無名の土地が広がっていて、自ら感じ取り体験して命名する余地が多いという事情が考えられる。
- (14) YHから、相部屋と共通談話スペースの組み合わせというアイデアを取り入れながら、規則を省き飲酒をしながらのミーティングを毎晩行う宿は、70年代の発生当初はユース民宿と呼ばれていた。その一部が86年にネットワークを作り広がったのが、とは民宿グループである。そのオーナーの多くがヘルパー経験者である。
- (15) 京都の最近の新設ゲストハウスには、この町家改造型の他に、他の建築の再利用型と新築型がある。戦災の少なかった京都では、大正から昭和期に建てられた町家が多く残ってきたが、いくつかの事情でその多くが急速に失われつつある(立命館大学地理学教室の継続的な学生調査実習による)。そこで以前は地元民以外は手が出なかった京町家でも、若者によるリフォームと新規利用がブームとなっている。「和楽庵」「胡乱座」などのゲストハウス開業はその選択肢の一つである。繊維関係の倉庫を改造した「京都っ子」は、産業の斜陽化による西陣の新たな模索とも言える。ニュージランド型ゲストハウスをうたう「Kズハウス」は、新築である(以上1999年以來の断続的聞き取り調査による)。このほかに沖縄県でもYH型の宿をゲストハウスと呼ぶ習慣があり、料金は本州の半額ほどである。また、瀬戸内海生口島の瀬戸田しまなみYHはこの10年ほど日本ゲストハウス協会の代表を名乗っているが、2006年7月現在会員獲得にいたっていない。
- (16) この聞き取りは、2002年1月に札幌市の彼女の民宿で行った。
- (17) 建築空間としてのYHについて考える場合、談話スペースの問題が重要と考える。新改築したYHの共用の談話スペースの利用は、その意図とは裏腹に非常に減っているとされる(大雪山白樺荘YHなど)。一つめにはオープンスペース方式の空間設計が、居心地の悪さを与えているかもしれない。このことは、戦後の先端的な学校の空間配置として知られながら、なかなか普及しないオープンスペース制の学校の持つ問題と共通していよう。たとえば西日本のある人気YHでは、入室し安いようにと談話室の引き戸を2002年にとり外したが、「閉じられた空間」がそれまで持っていた一体感をそぎ、初対面の会話のきっかけを失わせている。また二つめには、かつてホステラーの定期券や写真などが占領していた共用スペースが、シンプルで美しいコーナーに代わったことは、単に好奇心を誘うものが消えただけでなく、YHという空間の創造への参加感を失わせたかもしれない。事実全盛期までのYHはスタッフとホステラーの共同の遊び場であり、創造を保障する空間という側面を持っていたことは、日本のYHの大きな特徴であった。これら二点の検討が待たれる。
- (18) 『日本ユースホステル50年史』では、長谷川純三理事長が作家の橋田寿賀子氏との対談で「ミーティングに参加するとかがむしろユースホステルの特徴」と強調し、ミーティングを廃止された現状のYHを否定する点で、橋田と合意している(pp94-103)。しかしこうした組織全体の公式方針に反対する言説は、公式非公式を問わずしばしば散見されてきたが、実行は伴われなかった。そこで、変更の提起には、プロセスを意識した提案が大切と考える。